

保育者の「子どもの人権」実態調査に関する研究

中川 志保

Research on The Actual Situation of Childcare Workers Regarding “Children’s Human Rights”

Shiho NAKAGAWA

1. はじめに

児童福祉法第一章総則第一条において、「全て児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり、適切に養育されること、その生活を保障されること、愛され、保護されること、その心身の健やかな成長及び発達並びにその自立が図られることその他の福祉を等しく保障される権利を有する」と定められている。この条文は、国連で1989年に採択された児童の権利に関する条約

（以下、子どもの権利条約）が基本となっており、「子どもは権利の主体」を意味している。そして、日本は1994年に批准している。子どもの権利条約の4つの基本原則の中には、「生命、生存及び発達に対する権利」「子どもの最善の利益」「子どもの意見の尊重」「差別の禁止」があり、子どもは一人の人間として存在することが明記されている。また保育所保育指針（2018）や、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）においても「子どもの最善の利益を考慮し」という文言が総則の中に明記され、子どもの人権の基本原則の言葉がそのまま使われている。子どもの人権に関する意識は高いように思われる。

また、近年では2024年4月の「こども家庭庁」発足と同時に「こども基本法」¹⁾が施行された。すべての子どもが将来にわたって幸福な生活を送ることができる社会の実現を目指し、6つの基本理念の下で子どもの権利を尊重し、子どもの意見を反映させた新たなこども施策で、「こどもまんなか社会」実現に向けて動き出した。子どもを取り巻く社会が権利を保障し、尊重していかなければならないと言える。

しかしながら、子どもに罰を与えるような不適切保育の報道が後を絶たず、社会問題になっている。子ども家庭庁は全国の自治体と施設を対象にした実態調査²⁾を公表した。その中で不適切保育の件数は914件となっている。保育所保育指針（2018）の社会的責任において「保育所は、子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人ひとりの人格を尊重して保育を行わなければならない」と明記されている。大西ら（2022）³⁾は、「子どもに対する体罰や暴言が決してあってはならないことはもちろんのこと、日常の保育においても、子どもの身体的、精神的苦痛を与えることがないよう、子どもの人格を尊重するとともに子どもが権利の主体であるという認識をもって保育にあたらなければならない」と示されており、これらのことを踏まえば、保育所保育指針に反する行為はすべて不適切保育といえる」と指摘している。保育施設等において保育者の子どもの人権を擁護する意識を高めることが喫緊の課題である。また、先行研究として、林

（2016）⁴⁾の乳幼児の人権に関する教育・社会的活動報告や明柴（2023）⁵⁾の子どもの権利と

保育実践に関する研究などの調査・研究はある。だが、保育者を対象とした子どもの人権に関する知識と意識の実態に関する学術的研究は、不十分である。

2. 研究の目的と方法

2. 1 研究の目的

本研究では、『『子どもの人権』について考えてみよう』というテーマで「こどもの人権」について考えるきっかけ作りの園内研修を行った。研修後、アンケート調査を試み、保育者の「子どもの人権」に関する知識と意識の実態を明らかにし、その特徴について分析・考察することを目的とした。

2. 2 研究の方法

保育者へのアンケート調査を実施し、結果をグラフ化し特徴と傾向を明確にした。さらに軽量ソフト KH Coder を用いてテキストデータも数量化し分析を行った。

3. 園内研修について

園内研修では、『『子どもの人権』について考えてみよう』というテーマで約 30 分程度の啓発的な研修を行った。最初に、不適切保育の報道について内容を伝えた。しかし、多くの保育者は愛情をもって保育を行っていることを補足し、同園でも適切な保育を行っていることを確認した上で、子どもの人権の在り方を伝えた。そして、子どもの権利条約が国連で採択され日本も 1989 年に批准し、子どもの権利を守る保育を行っていくべきこと等、事例を示しながら講話を行った。

4. アンケート調査の概要

園内研修後にアンケート調査を実施した。

アンケートの構成： 個人属性、3 件法 6 問、自由記述 3 問

調査対象者： 認定こども園 1 園と保育園 1 園の保育者 計 40 名

回答期間： 令和 5 年 4 月～11 月

本研究においては、上記のうち、

- ・「人権教育」を受けたことがありますか？
 - ・「子どもの人権」について研修等で教育を受けたことがありますか？
 - ・「子どもの人権」を意識した言葉かけを行っていますか？
 - ・子どもの心身の発達を守るためには「子どもの人権」は必要だと考える理由を聞かせて下さい。
 - ・園内研修の感想をお聞かせください
- の 5 問について分析・考察を行った。

5. 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮として、アンケート用紙の冒頭に調査への協力は任意で、研究以外の目的で使用されることはないことを明記した。さらに個人情報の保護等の説明も行った。これは、宮崎学園短期大学の研究倫理審査委員会の承認を得ている。(承認番号：2023005)

6. 結果と考察

6. 1 基本属性

回答者は(表6-1)をみると、どちらの園も20代から60代までと年齢層は幅広い。保育者の勤務年数は、認定こども園の方が、1年～10年未満が47%で経験年数の浅い職員が多いことが窺えた。しかし、概ね両園とも年代・勤務年数共にそれぞれおり、バランスの取れた職場環境といえる。

表6-1 調査対象園の属性

年代	保育園	認定こども園
20代	4 (19%)	7 (37%)
30代	5 (24%)	5 (26%)
40代	5 (24%)	4 (21%)
50代	5 (24%)	1 (5%)
60代	2 (10%)	2 (10%)
計	21	19

勤務年数	保育園	認定こども園
1～5 未満	2 (9%)	5 (26%)
5～10 未満	4 (19%)	4 (21%)
10～15 未満	4 (19%)	2 (10%)
15～20 未満	3 (14%)	5 (26%)
20～25 未満	2 (9%)	1 (5%)
25～30 未満	4 (19%)	1 (5%)
30～	2 (9%)	1 (5%)
計	21	19

6. 2 選択肢式アンケート項目の調査結果と考察

(1) 「人権教育」を受けたことがあるかの回答

「人権教育」を受けたことがあるか(図6-1)の回答は、「ある85%・ない0%・分からない15%」であった。ほとんどの保育者は人権教育を受けたことがあると回答した。いつ受けたかの内訳(図6-2)をみると、「小学生37%・中学生34%・高校生14%・短大7%・社会人5%・園の研修3%」であった。義務教育時代に受けたという結果が半数を超えた。これは、道徳の授業で人権教育を受け、人権に対する知識はあると推測される。

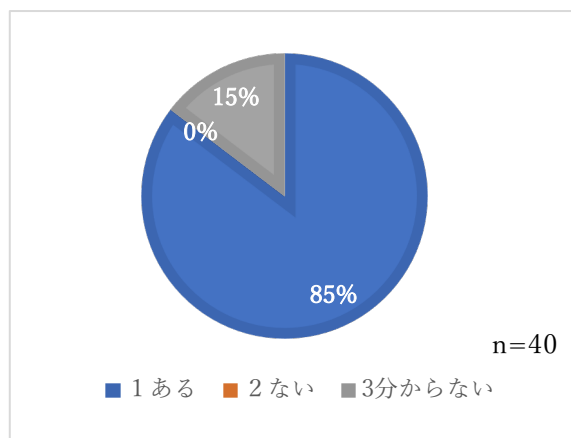


図6-1 人権教育を受けたことがあるか

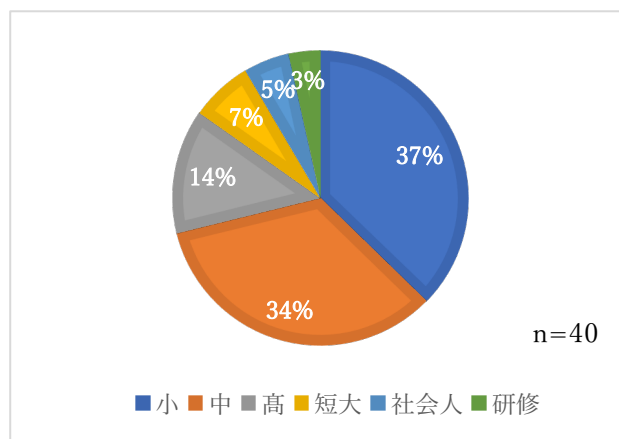


図6-2 それはいつか

(2) 「子どもの人権」について研修等で教育を受けたことがあるかの回答

「子どもの人権」に関する研修を受けた保育者（図6-3）は、59%である。しかし「ない」と回答した保育者が11%おり、30%の保育者は「分からない」と回答している。このことから、約4割が、「子どもの人権」に関する知識には不安があると推測され、「子どもの人権」に対する研修等の教育が必要だと示唆された。これは、「子どもの人権」に関する研修を園全体で行う環境作りが課題である。また、いつ受けたのか内訳（図6-4）をみると短大・大学で受けた保育者が半数を超えた。このことから、養成校である我が校は、「子どもの人権」に関してしっかりと取り組んでいく必要があると考える。また、「人権教育」は義務教育時代に教育を受けるが、それに対して「子どもの人権」については短大や大学等、高等教育機関で受講している。それは、日本が「子どもの権利条約」の批准が1994年であるが故、教育時期が異なってしまったと推測される。

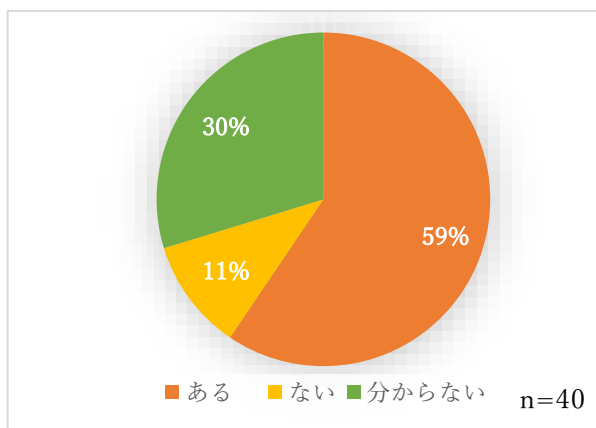


図6-3 子どもの人権に関する研修を受けたことがあるか

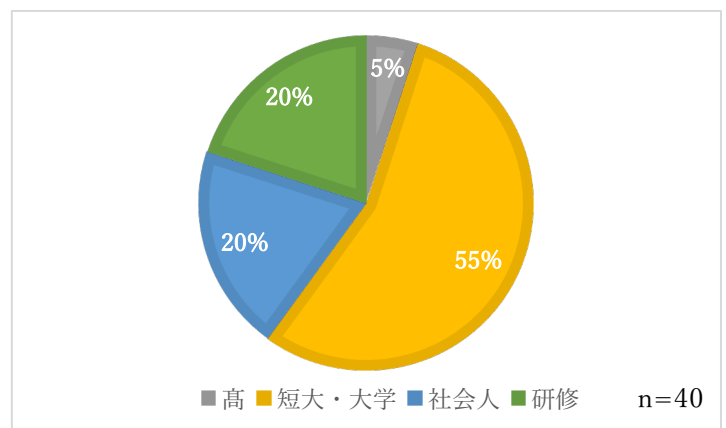


図6-4 それはいつか

(3) 「子どもの人権」を意識した言葉かけを行っているかの回答

「子どもの人権」を意識した言葉かけを行っているかについての回答（図6-5）では、「いつもしている45%・どちらともいえない52%・あまり考えていない3%」であった。「どちらともいえない」と回答した保育者は、意識する必要性を感じているが常時意識しているか、自信のない状態であろうと推測される。

アンケートの結果から、「子どもの人権」を意識した言葉かけができる保育者は、半数に満たないということが明確になった。

保育者は、子どもは尊重され大切に育てられなければならない、という意識を常に持つことが大切で、人権擁護に欠けると不適切保育へと繋がる要因となっているのではないかと懸念される。

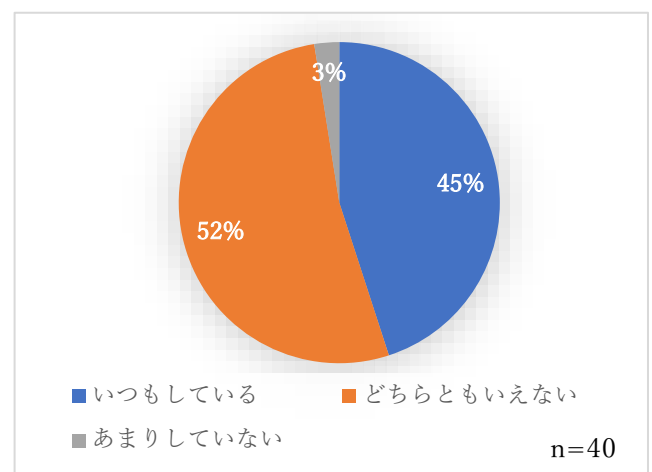


図6-5 子どもの人権を意識した言葉かけを行っているか

6. 3 自由記述の分析結果と考察

自由記述の分析に、テキストデータを数量的に扱い、内容を詳細に行うことができる計量ソフト KH Coder⁶⁾ を用いた。

(1) 〈子どもの心身の発達を守るためには、「子どもの人権」は必要だと考える理由〉と〈人権を意識した言葉かけを行っているか〉の対応分析

回答テキストデータを KHcoder に読み込む。総抽出語 1,000, うち使用語数 376 だった。その際、「語の取捨選択」機能を利用し、「思う」を削除し、「子どもの人権」は強制抽出した。記述統計の出現回数平均値は 2.38、文書数の平均値は、2.10 だった。分布プロットを確認した上で、語句の最小出現数 2, 文章の最小出現数を 1, 集計単位に段落を設定した。

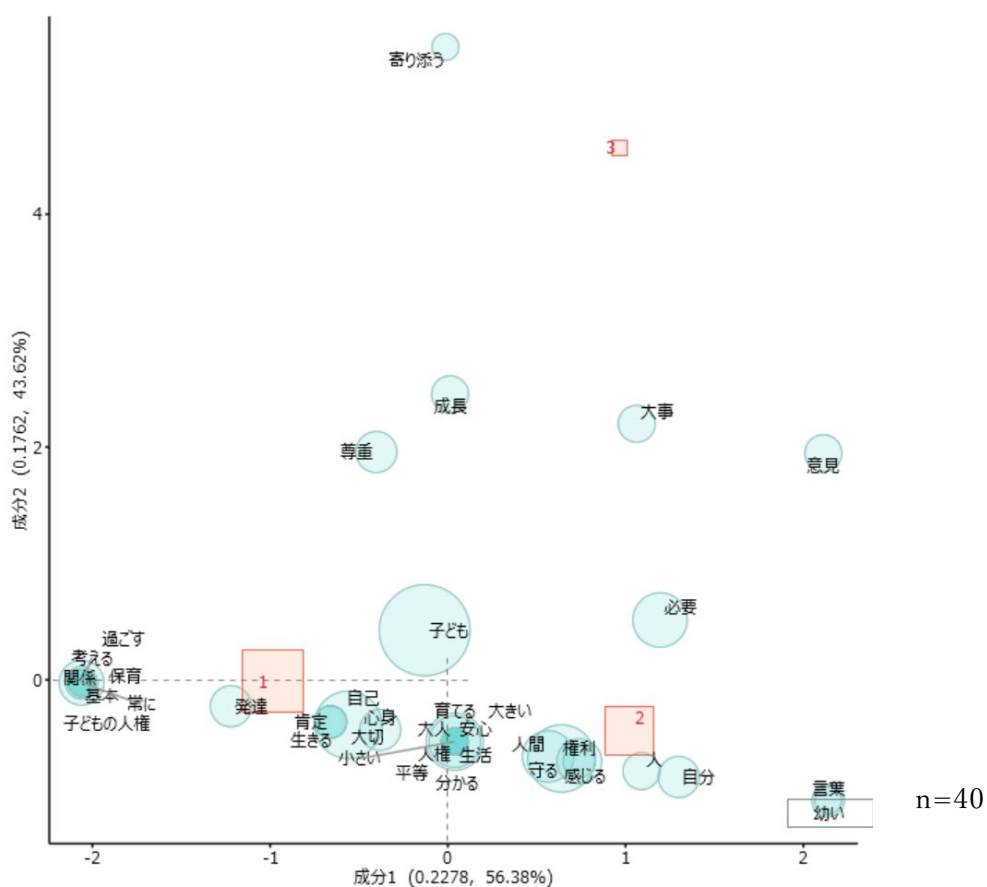


図 6-6 理由と言葉かけの対応分析

対応分析では、特徴のない語は原点付近にプロットされる。また、原点から離れている語ほど特徴づける語であると解釈される。

(図 6-6) をみると、

- ① いっしょしているの近くには、「発達」「生きる」「肯定」「心身」「大切」が付置された。
- ② どちらともいえないの近くには、「権利」「守る」「人間」「人」が付置され、
- ③ あまりしていないの近くには「寄り添う」が付置された。

以上のことから、保育者自身が「子どもの人権」に対しての言葉かけを意識せずとも、配慮した言葉かけができていることが推測される。「子どもは一人の人間」という記述が沢山あり、意識の中に子どもを大切にするという人格尊重の保育を行っていることも推測される。(図6-5)の結果より、「子どもの人権」を常に意識した言葉かけができていると回答した保育者が半数を超えていた。だが、対応分析の結果では「守る」「人間」「必要」「寄り添う」という人権を意識した言葉が数多く見られた。よって潜在的な意識はあるものの、言葉にできているかどうか自信が持てず回答に迷った様子が示唆される。それは、不適切保育の報道など様々な要因から、自分の保育に対して不安があることが原因の一つであると推察される。

(2) 園内研修に関する自由記述分析

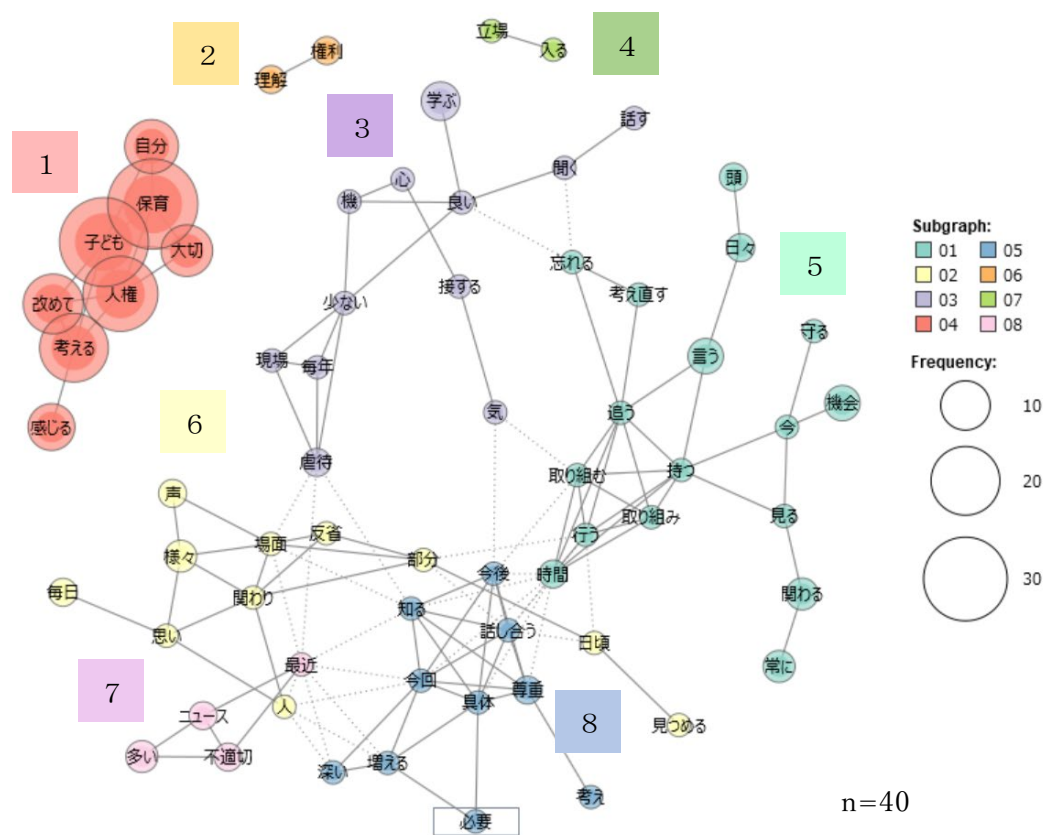


図6-7 園内研修に関するサブグラフ共起ネットワーク (modularity)

最後に、園内研修の感想の自由記述を KHCoder で分析した。総抽出語数 1,630，うち使用語数 643，記述統計の出現回数平均値は 2.81，文書数平均値は 2.47。分布プロットを確認した上で、語句の最小出現数 2，文章の最小出現数 1。そして一人の意見を一段落として入力したため、人ごとの分析を可能にするために分析単位を段落に設定，検出方法はサブグラフ（媒介）を用いた。尚、「語の取捨選択」機能を利用し，文の終わりに使用している「思う」は削除した。サブグラフでは，比較的強くお互いを結びつけている部分を自動的に検出してグループ分けを行

い、その結果を色分けによって示す。8つのサブグラフが抽出された（図6-7）。抽出された言葉について KWIC（keyword in context）コンコーダンス機能を用いて確認し、

①子どもの人権を改めて考える（赤）、②子どもの権利を理解（橙）、③毎年学ぶ機会が欲しい（紫）、④保育に関わる立場（黄緑）、⑤日々取り組む（緑）、⑥様々な場面の振り返り（黄）、⑦不適切保育のニュースが多い（桃）、⑧今後も話し合い、人権尊重の保育をする（青）とラベリングした。

また、園内研修の感想に関する自由記述の具体例を見てみると、下記のような記述があった。

- ・子どもの人権について以前学んでいた。しかし改めて振り返ることがなかったため、再確認することができてとても勉強になった。
- ・日々の忙しさのせいにせず、丁寧に子どもと向き合っていく必要がある課題だと感じた。
- ・深く考えたことはなかったが、最近のニュースで不適切保育が報道され、もしかしたら自分もやっているかも・・・と考えることが増えていた。今回をきっかけに子どもの人権について考える機会ができ、良かった。
- ・子どもの人権といわれると、保育の中であまり意識することがなかったように思う。今回の研修を受けて、保育者の考えだけで行動するのではなく、子どもの意思を大切にしなければいけないと改めて考えた。
- ・子どもの人権が守られる社会が当たり前になってほしいと思う。

上記より、研修後の感想では、「子どもの人権」に関する意識の高さが窺えた。不適切保育の報道もあり、自分の保育に不安を感じていた保育者には、自分の保育をみつめるきっかけになったと言える。また、「子どもの人権」について意識する気持ちを継続できるためには、研修の機会を設けたり、話し合いをしたりする働きかけが必要である。

7. 総合考察

保育者は、「子どもの人権」教育を受けてはいる。しかし、子どもへの人権を意識している言葉かけかというところでもない保育者が多い結果であった。だが、言葉かけの中には、子どもへの愛情があり、子どもを大切にする意識があることが明らかとなった。人権を意識せずとも子どもを大切にするという思いが、「子どもの人権」を守るということに繋がっていることが示唆された。それは、つまり保育者は潜在的に「子どもの人権」を守る意識を持っていることになると言える。6. 3（1）で述べたように、自分の言葉かけに自信がないのは確固たる知識がないことが要因の一つだろう。その確固たる知識を増やすためには、個々の保育の振り返りに加え、定期的な研修や組織内における問題・課題の共有を行うことが必要である。このことが日常的に実践されていくことで、保育の質を向上させることが期待できる。

8. 今後の課題

以上、保育施設等における「子どもの人権に」に関する知識と意識の実態をアンケート調査結果から分析・考察してきた。しかし、データ数が少なく今後も研究を続けていく必要がある。また、今後の課題として、保育者養成校の我が校は、学生に対しての取り組みだけでなく、定期的に「子どもの人権」に関する公開講座や出張講座を設けるべきだと主張したい。

引用文献

- 1) 「こども基本法」 <https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-kihon> (参照日 2024.2.14)
- 2) 「保育所等における虐待等の不適切な保育への対応等に関する実態調査」の調査結果について
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/e4b817c9-5282-4ccc-b0d5-ce15d7b5018c/de52c20b/20230512_policies_hoiku_4.pdf
 (参照日 2024.2.14)
- 3) 大西薫, 大西将史 (2022) 保育者がとらえる子どもへの不適切なかかわりに関する研究 --
 ・同僚保育者の視点から - , 聖徳学園短期大学部紀要, No.54, pp.1-12
- 4) 林友子 (2016) 乳幼児の人権に関する教育・社会活動報告, 帝京科学大学教職指導研究,
 Vol.1 No.1 pp.245-251
- 5) 明柴聡史 (2023) 子どもの権利と保育実践に関する研究 - 保育施設職員へのアンケート調査
 を通して - , 富山短期大学紀要第 59 巻, pp.19-28
- 6) 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版